

サクセスフル・エイジングのもう一つの観点 - ジェロトランセンデンス理論の考察 -

中 鳶 康 之^{*} ・ 小 田 利 勝^{**}

Another Perspective of Successful Aging: Some Considerations about Gerotranscendence Theory

Yasuyuki Nakajima and Toshikatsu Oda

はじめに

周知のように、社会老年学の領域において、高齢期における適応あるいはサクセスフル・エイジングをめぐる問題を議論する際にこれまでに頻繁に言及されてきた代表的な理論(学説)は、1950年代から70年代にかけてアメリカにおいて提起・検討・修正されてきた活動理論や離脱理論、分化的離脱理論、継続性理論である(小田, 1991; 1993; 1995)。これら諸理論・学説は、いずれも、退職後の社会的適応や生活満足の問題を退職前の職業を軸にした生活との対照で組み立てられており、その根底にあるのは、産業社会において成人に期待される役割に関する次のような文化的価値・一般的社会規範である(小田, 1998)。産業社会における成人という地位に期待される主要な役割は、何よりもまず職業上の業績を達成することであり、そのために努力することである。職業を軸にした社会関係の中で自らの欲求を充足させ、自分および家族の経済生活を支え、家族や職場で次世代の担い手を育成することによって社会に貢献することである。成人は、そうした役割の遂行を通じて社会の中での自分の居場所と自分とは何者であるかを確認しているのである。

退職は、成人に期待されるそうした社会的役割を個人から剥奪して自己同一性(アイデンティティ)の源泉を喪失させ、職業を軸に取り結んでいたさまざまな社会関係の網の目から個人を引き離す。退職者には、もはや成人の主要な社会的役割の遂行は期待されなくなり、代わりに「役割なき役割」が与えられることになる。そうした中で、社会との関わりをいかに維持し、自己同一性を確保し、満足感・幸福感を味わうことができる老後生活を送ることができるかが高齢期の社会的適応あるいはサクセスフル・エイジングの課題とされてきたのである。

しかし、この10数年の間に、そうした伝統的な(あるいは今日では既に古典的といってもよいかもしれない)理論に加えて、高齢期あるいは中高年期の生活(様式、スタイル)に対する新しい観点や理論が幾つか提起されてきている。ライフスキルやリビング・スキル、コンピテンスの概念を洗練して、高齢者あるいは高齢期における自立生活や新たな役割の遂行の問題を問い直そうとする試みや(小田,

*神戸大学大学院総合人間科学研究科博士前期課程2年 **神戸大学発達科学部人間科学研究センター

2000)、人間の発達過程に関する従来の段階区分と大きく異なるサード・エイジ(Third Age)という段階区分で中高年期を完成あるいは第二次成長(the second growth)の時期としてとらえる試みも提唱されている(Laslett, 1987; 1996; Walker, 1996; 小田, 1998; Sadler, 2000)。本稿で取り上げるジェロトランセンデンス(Gerotranscendence)理論も、そうしたものの一つである。

ジェロトランセンデンス理論の主唱者はスウェーデン・ウプサラ大学教授の社会学者ラース・トーンスタム(Lars Tornstam)である。かれは、離脱理論を新たにメタ理論的に捉えなおし、トランセンデンス(transcendence)という観点から高齢期における生活満足の問題にアプローチしている。「ジェロトランセンデンス」は、ギリシャ語で老人を意味するgeronと英語のtranscendence(超越、卓越、優越)を結びつけた合成語である。したがって、gerotranscendence を日本語に置き換えると、「老いの超越」とでもいえようか。その骨子は、高齢期における生活満足の問題を高齢期以前の物質主義的で合理的な観点から宇宙的かつ超越的な観点へのメタ・パースペクティブな変化として捉えようとするところにある(Tornstam, 1997)。しかし、この理論に関しては、いまのところ日本ではほとんど知られておらず、国際的にもマイナーな理論であり、評価も定まっていない発展途上の理論である。しかし、また、この理論は、これまでの社会老年学における諸理論とくに活動理論と離脱理論では説明できない、あるいはそれら理論では否定的に評価されがちな高齢期の生き方や生活スタイルに対して別のとらえ方があることを教えており、今日およびこれからの社会老年学研究に裨益することが大であると考える。そこで、本稿では、トーンスタムが提唱するジェロトランセンデンス理論の内容を可能な限り詳細に検討し、サクセスフル・エイジングに関する新たな理論としての有効性について考察することとする。そして、この理論が、世代間の関係とくに高齢者と若い世代が接触するケアや看護の現場における世代関係や文化、階層を越えて高齢期の生活に普遍的に適用しうる理論であるのかといった点についても触れることにする。

1. ジェロトランセンデンスの例示

トーンスタムは(Tornstam, 1997)「加齢の瞑想的次元」(The Contemplative dimension of Aging)と副題のつけられた論文の中で、ジェロトランセンデンスの具体例を報告している。その具体例は、世界観と自己態度(worldview and self-attitudes)の発達変容を検証するために行われた52歳から97歳までのスウェーデン人男女 50 人に対する自由回答形式のインタビューから得られたものである。ジェロトランセンデンスに到達したとみなされるエヴァ(Eva)とそうならなかったとみなされるグレタ(Greta)のインタビュー記録が紹介されている。

(1) エヴァ ジェロトランセンデンスへの到達

エヴァは元看護婦で 69 歳である。家庭は貧しくはなかったが、幼年時代には厳しくしつけられた。結婚し、3人の子供をもうけたが、数年前に離婚した。それに伴い深い精神的危機を経験している。離婚について聞かれたエヴァは、「精神的な危機を求める人はいないと思います。でも、そのことを通して何かを学ぶのだと思います」と答えている。

人生に対する態度が変化したかどうかと質問されたエヴァは、以下のように答えている。「最初は、コントロールできない流れに乗って、川に運ばれているような感覚がいつもしていました。川岸に行こうとしてもどうにもなりません。楽しいことにも、そうでないことにも流されてしまいます。でも、いまは、私自身が川であるように感じます。楽しいこともそうでないことも含んだ流れの一部であるように」。

時間の認識も変化したとエヴァは言う。彼女は、時間を過去から未来への直線的な流れとしてではなく、季節のように循環的なものとして認識している。それは、「人間は、いつも過去と未来に生きている」という認識である。過去、現在、未来の境界を越えたエヴァは、祖先とも強く結ばれることになる。「なぜなら、私も、私の祖先が生きた時代の時間の中で生きているから」と答えるエヴァは、祖先との関係の中に「永遠の生命」を見出したのである。

このような時間、空間の次元を超えて、それ自身のうちに秩序と調和をもつという意味での宇宙的 (cosmic) な認識を得たエヴァは、「私は物事を私自身に留めておきたい。私の内的宇宙、私の完全性がほしい。できるだけ秘密を保持することで、そうした完全性が維持されると私は考えます」という。

エヴァは、昔は「外側から自分自身をみることができなかった」といい、自分に自己陶醉していたという。「(昔は) 本当にナルシストでした。少女のころ、浜辺で横たわりながら、自分の肌に触れたり、キスしたりしたことを思い出します。今では多くのことが変わりました。顔に皺がより、肌も汚くなりました。お腹もたるんでいます。でも、そんなことは少しも気になりません。ぜんぜん意味のないことだからです」。加齢とともに自我が発達し、その発達をエヴァは楽しんでいる。

他者との関係に関して、エヴァは、「知り合いの年上の女性のところへ行って、座り込んでおしゃべりすることがとても楽しい。パーティや人の集まりに行くことよりも多くのことが得られます。大勢の人と過ごすことには、多くの信頼とごまかしが必要です。(昔は) とにかく歩き回り、分別のある魅力を身につけ、うまく行動するミドルクラスの女性が私でした。でも今は違います」という。

加齢とともに賢い決断を下したり、他の誰かに良いアドバイスをすることが容易になったかという質問に対して、エヴァは、「無口になることと賢い決断を下すことの両方が容易になりました。でも、今では簡単にわかることが一つあります。それは、良いアドバイスをするということを控えるということです」と答えている。エヴァは、物事の善悪を決めること、他者に関係することは簡単ではないと考えている。

最後に、生活の喜びの源泉が変化したかという質問に次のように答えている。「若いころは、映画館や食事や旅行に行くことが喜びでした。少しでも興奮するようなことが起きることを望んでいました。今の私の最上の時間は、キッチンに座り、そこにいるときに、ツバメが矢のように頭上を飛ぶ時です。それは、私がイラクサの畑に行き、スープのためにそれを摘む、春の一日です」。

(2) グレタ - 発達の中断

グレタは元学校教師で 72 歳である。穏やかで経済的な不安のない中産階級という環境の中で育ったが、13 歳で母を無くした。そして、数年前には夫を亡くした。息子が 2 人いる。娘も 1 人いたが、15 歳で亡くなった。

エヴァと同様に人生で困難な問題を経験してきたが、それらの問題を建設的なものへと移行することができないでいる。退職後の生活について、「老人になれば、活動的で冒険があると思っていましたが、そうはなりません。そうした期待を私は簡単に諦めてしまったことに自分自身でも驚きました。すぐに、わたしは先のない老人としての生活を始めました。仕事がないことがとても残念です。働くことの満足感を失ってしまいました」と答えるグレタは、中年期の理想と現実の定義に固くしがみついたままのようである。そして、彼女は次のような結論に到達する。「私は自分をみつめて失望ばかりしています。私は不運なことに、何ごとにもかなり無関心な状態になっています。他人や物事に対する関心を失ってしまったのではないかと恐れています」。「私は(以前は) とても大きな社会関係の中で生きていました。しかし、それも…。いまは、何にも関心がもてません。暇と無関心がいまの私です」。グレタの中年期の理想からすれば、老人には価値が全く無いことになる。グレタは人生に満

足していない。

(3) エヴァとグレタの事例からの考察

エヴァとグレタは、外見上は、社会関係が縮小して引きこもりがちな生活をしている高齢者として、われわれにはどちらも同じように映るかもしれない。また、そのような生活に満足できる人か、そうでないかというのは、単に性格の違いだけのようにも見える。しかし、ウェーバーの行為概念に従って、「外見上は『何もしていない』あるいは『できない』ように見えることでも、それが意識的に『しない』あるいは『しようとししない』ことの結果であれば、言い換えれば、そのことを『しない』ことがその人にとって意味ある行動だとすれば」(小田, 1999)、エヴァとグレタの生き方に対する見方は大きく異なってくる。

ジェロトランセンデンス理論では、エヴァとグレタとを比較したとき、エヴァは、絶望と対峙したうえで、エリクソン(Erikson)のいう自我の統合(ego-integrity)に到達したと捉える。エヴァは、自我の統合と絶望のバランスをとるだけではなく、それら乗り越えて新たな境地に達したということである。それは、心身の二元性をも超越した選択的な発達をとげたと解釈することでもある。

2. ジェロトランセンデンス理論の生成過程

ジェロトランセンデンス理論は、その理論としての出発点を離脱理論においている。そして、離脱理論を再定式化(reformulation)することを、その理論構築の目的としている。そこで、ジェロトランセンデンス理論が生成される出発点では、離脱理論はどのように理解されたのか、そして、どのような過程を経て再定式化されるに至ったのかを、ジェロトランセンデンスに関するトーンスタムの最初の論文「ジェロトランセンデンス - 離脱理論のメタ理論的再定式化」(Tornstam, 1989)を取り上げて見ていくことにする。

(1) 離脱理論からの出発

ジェロトランセンデンス理論がその理論的出発点として位置付けるカミング(Cumming)らによる離脱理論は、加齢によって個人は社会から離脱する傾向を有するとともに社会も高齢者を拒否してゆくという傾向があり、その過程は不可避的な過程であることを述べたものである。また、離脱理論は、そのような過程が、個人の満足感と内面的な調和に作用するとした。そのうえで、こうした過程は文化を問わず普遍的なものであることを主張したのである。離脱理論は、発表された当初から多くの議論を巻き起こした。

離脱理論は主要な3つの仮説から成り立っている。全ての社会は、一方的に、あるいは何らかの方法で高齢者を社会の傍らに押し出す。他方、個人は、自分自身を社会から離脱させる。この個人の離脱は、社会的離脱と心理的離脱に区分される。社会的離脱とは、社会的な役割への参加と社会的役割のなかで過ごす時間の減少という社会相互作用の縮小現象であり、心理的離脱とは、共同体や他者への関心や感情的な関わり合い縮小し、内向してゆくことである。社会的か心理的かを問わず、高い程度 of 生活満足感と充足感を個人が経験しつづける。離脱の自然な過程が脅かされるようなことや何らかの理由で刺激をうけることがあれば、満足感は減少する。

離脱理論は、それまでに広く認められていた「活動理論」が唱えた充足と満足は社会的活動によって導かれるという説に異議を唱えることとなった。離脱理論のこの消極的なニュアンスは、ヒューマニスティックな立場からは否定的に受けとめられることになった。

その後、多くの老年学者が離脱理論の3つの仮説をめぐって研究をすすめた。彼らは、第三の仮説である老年の生活の満足の理由を活動か離脱かに求めた。ハヴェンス(Havens)らは、高齢期の生活満足に重要なのは活動でも離脱でもなく、継続であるとした。また、ザスマン(Zusman)らの新しいモデルでは、「社会崩壊現象」の概念 - 個人の社会環境と自己認識との相互作用が崩壊する過程 - が紹介され、離脱パターンがいかに崩壊するが示された。

離脱理論は、このようにして社会老年学者から擁護されざる理論となった。このような経緯を踏まえながら、ジェロトランセンデンス理論の生成の出発点となる離脱理論に対するトーンスタムの関心を支えたのは個人的な経験であった。たとえば、トーンスタムのかつて共同研究者であったポーランドの老年学者である故ピオトロースキー(Piotrowski)は、離脱理論の批判の誤謬を指摘すると同時に離脱理論の有効性を主張していた。ピオトロースキーは1979年の国際老年学会において「(離脱理論の理論的有効性の)証拠は私自身の中に現れている」と自己の見解を主張した。

また、主観的、経験主義的な各種のレポートは離脱理論と同様の理論的観点を有することを示唆していると捉えていた。高齢者を社会活動や活動療法などに適応させようとする高齢者と接する現場のスタッフは、自分たちの行動が何か間違っているのではないかという感情にとらわれるという事実を認めていたのである。トーンスタム自身が行った孤独に関する調査(Tornstam, 1988)においても、役割の喪失や他の損失にもかかわらず、孤独に関する意識が年齢が高くなるほど減少し、孤独の癒しとしての他者との相互作用は年齢にしたがって減少したという結果を得ていた。このような所見がジェロトランセンデンス理論の出発点としての離脱理論の再認識へと向かわせたのである。

(2) 反「離脱理論」とジェロトランセンデンス理論

トーンスタムは、離脱理論を再認識する過程から、反「離脱理論」の理論を捉えなおすことで、それが同じ理論的枠組みの中にあることを確認した。つまり、それらが実証主義に基づいており、個人を内的・外的な力によって動かされている対象とみなし、その行動に関心を寄せているとしたのである。このような観点からジェロトランセンデンス理論では、メタ理論的な理論転換の仕組みを提唱することになったのである。つまり、解釈におけるパラダイムの転換を主張したのである。

そのような異なった視点から離脱理論を見つめる老年学者の研究として、離脱のパターンを現象学的に叙述したガットマン(Gutman)の研究がある。かれは、主題統覚検査(TAT)を用いて、アメリカ人、ナバホ・インディアン、低地および高地マヤインディアン、シリアのドゥルーズ族を比較調査した。その結果、かれは、全ての社会に共通するパターンすなわち若者には競争や攻撃という特性をより多く反映して「アクティブ・マスタリ」(active mastery)が、老人には連帯や理解という特性をより多く反映して「パッシブ・マスタリ」(passive mastery)と「マジカル・マスタリ」(magical mastery)があることを発見した。そして、ガットマンは、その傾向は文化に左右されない普遍的なものであって、年をとったからといって離脱へ向かう動きではないと結論づけたのである。トーンスタムは、ガットマンの見解に関して、個人の行動が新しい状況をマスターするための機能的な手段となるという点について伝統的な見方にとどまっていると批判し、離脱理論の新しい理解に到達するためには、さらなるメタ理論的パラダイムを必要とするとした。

(3) 東洋的枠組みからエリクソンの発達モデルへ

離脱理論の新しい理解を求め、実証主義的な思考法からの解放を試みるために、トーンスタムは、新たな理論的枠組みを西洋哲学から東洋における禅に求めた。禅の世界観が、境界の広がりや拡散、宇宙的な認識の中に生きることであると理解すると、西洋人の生活は物質的なものに強迫された世界

となるが、逆に禅者の瞑想生活は西洋からみれば離脱と決めつけられてしまう。しかし、「主体と客体の取り払われた世界」に暮らす禅者のような考え方は従来の老年学には見られないものの、西洋哲学とまったく無縁なものではないことをトーンスタムはユングの集合的無意識のなかに見出している。

祖先の経験が子孫に反映、受け継がれ、われわれの心の中に積み上げられているという意味において、「集合的無意識」は、個人、世代、場所の境界がない超世代的、超空間的な構造を有していることになる。そして、ユング派の研究者の中には、瞑想を通して集合的無意識が得られるとするものもあり、東洋と西洋の哲学の関連を見出すことができると、彼は考えたのである。

禅者が生きている世界は、西洋的な意味での離脱とは異なる世界である。それは、個人、世代、場所にそれぞれ厳然たる境界をおく西洋社会における思考法からは認識できない世界すなわち「超越」の世界である。年をとることを禅者のような段階に至る過程とみなせば、それは西洋社会において定義づけられた離脱の過程としてではなく、メタ世界というより高次の段階へ向かう過程すなわち超越の過程とみなすことができる。これが、トーンスタムのいうジェロトランセンデンスである。そして、カミングらが離脱理論の普遍性を主張したように、トーンスタムは、ジェロトランセンデンスは、加齢に本質的で、しかも文化に拘束されない普遍的な過程であると考えたのである。

トーンスタムにしたがえば、ジェロトランセンデンスは、生きている限り継続する過程である。したがって、それは、人生の途上で遭遇するさまざまな危機(life crisis)によって阻害されもし、促進されもする。年をとれば、だれでもが自動的にジェロトランセンデンスの高い段階に到達するのではない。難治性の病に冒され、死と向きあったとき、たとえ彼/彼女が若かったとしても新しい世界観が構築されるように、ジェロトランセンデンスの過程には多くの異なった段階があるということである。そして、その究極の到達点が新しい宇宙的な観点なのである。

最上の段階に至る人生過程(life process)としてジェロトランセンデンスを構想したトーンスタムがエリクソンの発達モデルに目を向けることになったのは当然のことであった。周知のように、エリクソンのモデルは、加齢に伴う発達過程は7つの段階を経て、最終第8段階の「自我の統合」に到達するというものである。そして、この段階で、個人は、その良し悪しにかかわらずそれまでの人生を受け入れ、満足感を得るといっているのである。

しかし、エリクソンのいう第8段階とジェロトランセンデンスの段階には相違点が存在する、とトーンスタムは指摘する。先にあげたガットマンの調査で、高次のジェロトランセンデンスに達したと見られる個人は、過去を振り返って満足しているわけではない。エリクソンによれば、第8段階に達しない場合に経験することは死の恐怖と絶望であるが、そうならず「自我の統合」を果たすことができるのは、そこに「英知」が働くからである。トーンスタムはここに注目し、エリクソンが第8段階の特色を「英知」に求めたのは、ジェロトランセンデンスの意味を理解するためのパラダイムを得られなかったからだと考えたのである。

エリクソンの妻であり、同時に彼の共同研究者であったジョアン・エリクソン (Joan M. Erikson) が語った言葉をトーンスタムは紹介している。「私自身が 91 歳になったとき、英知や統合といった言葉が歳とともに私が経験していることを決して何も表現していないということに気づき始めた。そこで、大胆にも私は第8段階を改定することにした…第9、第10の段階を包含して、それらをジェロトランセンデンスとして扱うことを試みたのである」(Tornstam, 1999a; Erikson, 1997)。

(4) ジェロトランセンデンスとおとぎ話からみた超越

トーンスタムは、離脱理論を出発点とし、離脱理論への数多くの批判を検討した後に東洋的な枠組みを通して再び西洋哲学の流れに戻ることにした。そして、そうした経緯の末に、彼は、加齢過程

を物質的で合理的な枠組みではなくて、宇宙的で超越的な枠組みでとらえることの意義を確信することになったのである。

トーンスタムがいうジェロトランセンデンスを構成する具体的内容を整理すれば次のようになる。

「万物の魂との宇宙的な親交の感覚の増大」(万物を流れるエネルギーの一部として経験することができる)。

「時間、場所、対象に対する認識の再定義」(時間の認識が、過去から現在、そして未来へという不可逆的な直線的流れとしてではなく、時間的境界の意味が薄れて渾然一体としたものとして認識されるようになる。したがって、時間の流れる速さに対する認識も変わる。対象の認識の変化は、あなたと私、私たちと彼ら、といった境界の消去を意味する。すべてが一つになるという考えが優勢になり、自己中心性が消失する。その結果、閉じられた自己から宇宙的な自己へと自己認識が変化する。自己を特別に重要なものとみなさなくなり、宇宙のエネルギーの一部とみなすようになる。その結果、個人的な部分は重要でなくなる)。

「生死の認識の再定義と死の恐怖の減少」と「過去と未来の世代に対する親近感の増大」(生死も個人的なものではなくなり、生命のすべてのエネルギーの流れが重要となる。死に対する恐怖心が減少し、同時に、過去、現在、未来の世代との親近感が広がる。こうした点については、エリクソンも第8段階に到達した人たちの典型例として述べている)。

「表面的な社会相互関係の減少」と「物に対する興味の減少」(表面的な社会関係や物品への関心が減少する。こうした変化を経験した個人には、社会との関わり合いに取り付かれた多くの若者を哀れみをもって見ることになる)。

「瞑想的時間の増加」(万物の魂との親交と自分自身を通して流れる宇宙のエネルギーを経験すると、もっとも重要なものに時間が使われることになる)。

このような個人の認識上の変化は、当然のことながら、単なる社会的引きこもりを意味しない。しかし、離脱理論がそうであったように、西洋社会ではこのジェロトランセンデンスに適合する役割が高齢者に与えられていないため、引きこもりとみなされてしまうのである。

トーンスタムは、以上のような内容に関する研究をチネン(Chinen, 1989)が老人の超越に関するおとぎ話を通して行っていることを紹介している。チネンは、おとぎ話は宗教的、社会的、心理的超越の統合過程と老年の発達に関する重要なガイドラインであるとしている。西洋起源のおとぎ話を中心に分析しながら、スラブ諸国のものも含み、2,500 あまりのおとぎ話を検討したところ、年老いた主人公が登場するおとぎ話が西洋には少ないことを発見する。つまり、圧倒的に若い主人公が登場するのである。しかし、東洋やスラブ諸国のおとぎ話には、ジェロトランセンデンスを支持するようなおとぎ話が数多くある。このような結果から、トーンスタムは、西洋社会の若さを重視する見方はジェロトランセンデンスという加齢過程を阻害しているかのように見えると述べている。

(5) 西洋文化と老年期の発達

トーンスタムによれば、ジェロトランセンデンスと一致する老人の世界観は、西洋文化では、風変わり、非社交的、精神的混乱とみなされてしまい、ジェロトランセンデンスに適合した見方や場所、役割は存在しないが、シリアのドゥルーズ派のような世界では、宗教的儀式がジェロトランセンデンスに対して社会的な役割の場を提供している。西洋文化では、社会活動と自己の強さ、世界に対する現実主義的な見方、対応が重視される。このような社会の道徳的判断、一般的な社会規範からは、離脱ということに対して罪悪感が形作られる。そのために、ジェロトランセンデンスが阻害されることになる。また、高齢者介護の現場のスタッフや近親者がジェロトランセンデンスの自然なプロセスを

阻害することにもなる。つまり、このような人々は、「内省への移行」を引きこもりとして否定的に評価し、「我々の理解し得ない引きこもり」から高齢者を引きずり出し、再活性化しようとする。このようにしてジェロトランセンデンスの発達が妨害され、罪悪感に見舞われた後、高齢者は、以前の世界観に後退し、社会的崩壊現象を経験することになる。

トーンスタムは、ジェロトランセンデン스가加齢に伴う自然な発達の過程であることをベック(Peck)が間接的に証明しているという。ベックは、数千人のビジネスマンを対象に、中年と老年期の間の発達の危機に焦点を当てて、彼らがいかに加齢を取り扱うかを研究した。トーンスタムは、それを次のように要約している。

「自我の分化、または仕事への没頭」 - 以前の仕事に自信がもてなくなる過程で、自分の生活に新しく順応しようとする。自己再認識の過程で仕事にはなくほかの多くのことに重点が移っていく。反対に、以前の職業から離れられない人もいる。自我の分化は、発達過程の危機に対する自然でよい形の解決である。

「身体的超越、または身体への没頭」 - 老人の中には、健康を生活の最大の問題と考え、些細な病気でさえも気にとめ、徐々に自分の身体にとらわれていく人がいる。反対に、自分の体のことをよく理解し、心配せずに身体を超越するかのように見える人がいる。身体的超越は、多くの人が潜在的に持っている自然な発達である。

「自我の超越と自我への没頭」 - 高齢になったという認識と死の必然性は、寛大で利他的に生きるように高齢者の自我を再編成させ、死を受容させる。しかし、さまざまな理由で、多くの高齢者はそのような段階に到達できない。その結果、自我への没頭と死の恐怖を発展させる、と述べたのはエリクソンであるが、ベックが見出したのは、西洋社会では、当然そうあるべきだとされる価値の様式と価値観がジェロトランセンデンスを阻害しているということである。

3 . ジェロトランセンデンス理論研究の概要

ジェロトランセンデンス理論は、高齢期の生活に関する他の理論、たとえば活動理論やエリクソンの発達理論と大きく異なるわけではないとトーンスタムは述べている。つまり、異なるように見え、表面上矛盾を抱える理論が同時に有効なのだという。同様に、ジェロトランセンデンスと社会的崩壊現象はどちらも真実であるという。また、相互作用論が主張するところも否定してはいない。しかし、それらの理論では高次のジェロトランセンデンスに達した人たちをとらえることができないと指摘する。その意味では、ジェロトランセンデンス理論が主張するところは、これまでの経験的、実証的老年学に対する大きな挑戦であるといえる。

外見上は同じように見えても、その人がジェロトランセンデンスの過程にあるのか、それとも、これまでの意味での離脱の過程にあるのかをいかに識別するかが問題である。その識別に関しては既に簡単に触れたが、ここで、あらためて詳細に検討するために、トーンスタムがいうジェロトランセンデンスの3つの次元とかれの実証研究(Tornstam, 1994)を取り上げることにする。

(1) ジェロトランセンデンスの3つの次元とその到達段階

「理論的および経験的探求」と題された1994年の論文において、トーンスタムは、ジェロトランセンデンスへと移行する個人に認められる連続的な変化について触れている。その変化は、52歳から97歳までのスウェーデン人へのインタビューと74歳から100歳までのデンマーク人912人の量的な研究から見出されたものである。その後、彼は、ジェロトランセンデンス理論について語る場合に、そう

した変化をジェロトランセンデンスの徴候や次元として記述するようになった(Tornstam, 1996a)。それらを整理すると次のようになる。

ジェロトランセンデンスの3つの次元

(a) 宇宙的水準

時間・場所：時間と場所の定義の変化が進展する。たとえば、過去と現在の境界の超越が起こる。

前の世代との関係：前の世代への愛情が増し、世代的連続性を自覚するようになる。

生と死：死に対する恐怖が消え、生と死について新しい認識が生まれる。

生命の神秘：生命の神秘性という次元を受け入れる。

喜び：盛大な行事からささやかな経験まで、小さな宇宙の中に大宇宙を経験する喜びが現れる。

(b) 自己

自己との対決：自己の隠された局面 - 良いものも悪いものも - が発見される。

自己中心性の減少：自己中心的な世界からの撤退が生じる。

肉体の超越の進展：肉体への配慮は続けられるが、それにとらわれなくなる。

自己の超越：利己主義から利他主義へ移行する。

内面の子どもの再発見：子ども時代に戻り、変身することを経験する。

自我の統合：人生のジグソーパズルの一片が人生全体を形作ることを理解する。

(c) 社会と個人の関係

関係の重要性と意味の変化：表面的な関係に対する関心が減り、選択的になり、一人を望むことが多くなる。

役割：自己と定められた役割の違いを認識する。時には役割を放棄しようとする。人生における役割の必要性を楽に理解するようになる。

無垢の解放：解放された無垢が成熟を高める。チネンによれば、解放された無垢は、子どものような自発性と成熟した実用主義によって構成される(Chinen, 1989)。

現代的禁欲主義：財産の重さの理解と禁欲主義からの自由。

日常の知恵：善悪の区別や判断の保留。アドバイスを与えることの難しさの認識。善悪二元論の超越。

ジェロトランセンデンスの到達段階

高い段階のジェロトランセンデンスにある人には次のような特徴が見られる。低い段階の個人に比べて社会的活動の自己管理度が高い。より高い生活の満足感を得ている。社会活動により高い満足感を示している。社会活動への依存度が低い。より活動的で複雑なコーピング・パターンが見られる。

生活満足感に関して消極的で継続的な変化を伴う個人は、ジェロトランセンデンスを発達させる可能性が高い。

ライフ・クライシスはジェロトランセンデンスの発展を促進する。

ジェロトランセンデンスの徴候を示す個人を疾患や抑うつ、抗精神薬使用の犠牲者として説明してはいけない。

(2) トーンスタムの行ったジェロトランセンデンスの実証研究

分析の枠組み

ジェロトランセンデンス理論に関する本格的な調査研究の成果は、1994年に発表された上記の論文(Tornstam, 1994)に紹介されている。それまでは、いわば試案であり、未検証の仮説であったジェロトランセンデンス理論がはじめて明確に実証されたと報告している。

これまでの述べてきたことからもうかがえるように、トーンスタムのいうジェロトランセンデンス

理論には、ともすると哲学的思弁と受け取られるような内容が多く含まれている。したがって、それを経験的研究として進めるには困難な点が多いであろうという印象を抱かせる。トーンスタム自身も、そうしたことを考慮して、定量的分析を行う際の課題として次のようなことをあげている。

- 1) 「認識」: ジェロトランセンデンス理論でいうさまざまな変化を高齢者が実際に理解すること。
- 2) 「分類」: 高いジェロトランセンデンスを示す個人や低いジェロトランセンデンスを示す個人というように、さまざまな段階を示すジェロトランセンデンスをどのように明確に見きわめるか。
- 3) 「ジェロトランセンデンスと社会活動」: ジェロトランセンデンスと離脱理論の違いに焦点を当てて、ジェロトランセンデンスは社会的引きこもりとは異なることを明らかにする。
- 4) 「ジェロトランセンデンスとコーピング・パターン」: ジェロトランセンデンスの高い段階にある個人がいかに人生の問題に対処しているのかを明らかにする。より成熟した発達の段階としてのジェロトランセンデンスには、より高次のコーピング・パターンや同時にいくつかの異なったコーピング・パターンが伴っていると考えられる。
- 5) 「ジェロトランセンデンスと生活満足感」: ジェロトランセンデンスの発達は、生活満足感を増加させる正常な発達過程である。逆に、ジェロトランセンデンスに達しない個人の生活満足度は低いことが予想される。
- 6) 「精神疾患や抗精神薬の使用との混同の可能性としてのジェロトランセンデンス」: ジェロトランセンデンス理論の批判として抑うつや精神疾患が同様の「症候」を示すこととの関係や反応があげられる。また、抗精神薬の使用も同様の「症候」を示すと批判されるだろう。ジェロトランセンデンスとそのような症候との相関関係を否定し、ジェロトランセンデンスの発達が正常で建設的な発達であり、抗精神薬の必要性を減少させるという仮説を検証する。

方法

1986年と1990年に行われたデンマーク人の男女912人を対象にした縦断調査(郵送調査)をもとに、1990年にジェロトランセンデンスに関する質問調査を行っている。回答者の年齢は74歳から100歳までであり、平均年齢は72歳である。男女比は女性64%、男性36%であり、この男女比は、デンマークにおける74歳以上の男女比と同等である。また年齢分布も母集団に近似していた。

主要評価の質問項目

ジェロトランセンデンスの到達段階を調べるために、「いまのあなたは、50歳のころと比べて、人生や生活についての見かたが異なっていると思いますか」という質問を提示し、以下にあげるような10項目に関して、「はい(自分自身思い当たることがある)」と「いいえ(自分には思い当たらない)」の2件法で回答を求めている。10項目の質問は主成分分析によって次のように「宇宙的超越」(Cosmic-Transcendence)と「自我の超越」(Ego-Transcendence)の2つの主成分が抽出された。

(Cosmic) 宇宙的超越

1. 50歳のときにくらべて、生と死の境があまり目立たないように感じるようになった。
2. 永遠に続く生命にくらべて、個人の生命はいかにささやかなものかということに、深く共感する。
3. 50歳のときと比べて、今日では普遍的なものと、すばらしい相互関係を感じる。
4. 実際には離れたところにいる人でも、しばしば近くにいるのだと思うような経験をすることがある。
5. 過去と現在の距離が消えていると感じる。
6. 祖先と新しい世代の両方にとても親密感を覚える。

(Ego) 自我の超越

1. 以前ほど、自分のことをまじめだとは思わなくなった。
2. 50歳の時に比べて、物の重要性が減った(物への執着心が弱くなった)。

- 3.表面的な人づきあいにあまり関心がなくなった。
- 4.50歳の時に比べて、内面的な世界(たとえば物思いにふけったり)に幸福を感じている。

社会活動の評価

以下の5点について評価している。高齢者の主導権に着目したため、子と孫との活動は除外されている。

- 1.他の人をたずねて、その人の家を訪問する。
- 2.他の人が、あなたの家を訪問する。
- 3.子、孫以外の親戚とのつきあい。
- 4.他の友人とのつきあい。
- 5.室外での余暇活動。

生活満足度

現在の生活の全体についての満足度を単独に5段階で自己評価する。

高齢期の憂鬱症評価 (Old-ageDepression Scale)

- 1.孤独感。
- 2.時間の経過の遅さ。
- 3.無視されていると感じる。
- 4.余計者であると感じる。
- 5.老いを感じる。

以上の5項目について、同意から非同意を3件法で評価している。この尺度の信頼性係数(クロンバックの)は0.77であった。

心理的緊張・過労の評価

現在の症状をつぎのリストから選び、数える。「理由のない疲労感」、「不眠症」、「神経質」、「不安」、「抑うつ」。

対処行動類型(Coping Pattern Typology)

問題や心配事に出会ったときに、どのように対処するかを以下のような4つの項目に関して同意、非同意の2件法で評価する。

- 1.忘れようとつとめるか、何もなかったようにふるまう。
- 2.心配事を追い払うように、何か他のことをする。
- 3.親しい人と問題の解決方法について話し合う。
- 4.問題解決のために完全に集中する。

因子分析によって、以上の4項目から2つの次元すなわち項目1と項目2で構成される防御的対処の次元と項目3と4項目で構成される攻撃的対処の次元である。これら2つの次元に基づいて次のような4つのコーピング・パターンが構成された。「Low Copers(低い対処)」(防御と攻撃のどちらも平均以下)、「Multi Copers(多元的対処)」(どちらも平均以上)、「Deffensive Copers(防御的対処)」(防御的対処がまさっており、攻撃的対処は平均以下)、「Offensive Copers(攻撃的対処)」(攻撃的対処が高く、防御的対処は平均以下)。

結果

1994年の結果をもとに、新しい概念としてのジェロトランセンデンス理論が離脱理論や社会的崩壊現象と相違する点が次のように得られたとしている(Tornstam, 1996)。

1)最も基本的なこととして、離脱理論がいわゆる内向を意味しているのみであるのに対し、ジェロトランセンデンス理論は、高齢期の現実に関して新しい定義を与えている。

2)離脱理論が社会的引きこもりと結びついているのに対し、ジェロトランセンデンスは、データによると社会活動と明確に相関関係があることが示された。同時に、思索のための孤独も高い程度で必要とされていた。とくに、ジェロトランセンデンスと明確に相関のある社会活動は、個人に主導権が与えられた活動であった。

3)高い段階のジェロトランセンデンスにある個人のコーピング・パターンは、離脱理論が示したパターンとは相関関係が認められなかった。ジェロトランセンデンスが社会的崩壊現象の観点を形成するという仮説も支持されなかった。高い段階のジェロトランセンデンスにある個人のコーピング・パターンは、受動的で防御的なパターンではなくて、より活動的で複合的なパターンを特徴としていた。

4)高い段階のジェロトランセンデンスは、生活の満足感と社会活動の満足感の両方ともが高い段階にあった。同時に、社会活動が生活満足の本質的な要素としては弱いことも明らかにされた。

4 . ジェロトランセンデンス理論からの展開と可能性

1989年にジェロトランセンデンス理論を発表したトーンスタムは、1994年以降の論文では、ジェロトランセンデンス理論そのものを深化させ、経験的なデータに基づいた研究結果を発表してきている。また、それらと並行して、ジェロトランセンデンス理論を洗練する論文を発表している(Tornstam,1997b ; 1997c ; 1999b)。

以下では、高齢者と介護従事者の関係をジェロトランセンデンス理論からとらえなおした場合に、その関係がどのように変化するかという視点からジェロトランセンデンス理論の有効性を検証した2つの論文を取り上げることとする(Tornstam, 1996b, 2000)。

(1)「高齢者介護のための補足的枠組みとしてのジェロトランセンデンス理論の紹介 - 介護スタッフへの教化」

この論文が目的としているところは、高齢者介護のあたらしい理論的枠組みとしてのジェロトランセンデンス理論を現場のスタッフに教化することで得られる変化を明らかにすることである。対象はスウェーデンの小さな市にあるナースングホームで働く90人の看護婦と助手である。高齢者の理解と介護についてかれらと議論し、この議論の中でジェロトランセンデンスを紹介した後、6ヶ月後にかれらがジェロトランセンデンス理論にどのような影響を受けたかを郵送法で調査した。その結果、スタッフの半数が介護対象者に対する新しい理解に至ったことがわかった。また、特殊な介護対象者に対する介護の態度が変化したと回答したスタッフが3分の1あった。そして、ジェロトランセンデンス理論は、仕事における不全感に対する罪悪感を軽減することとなっていることが明らかにされた。

(2)「ナースング・スタッフによるジェロトランセンデンスの解釈」

高齢者と接する現場で働くスタッフが、高齢者のジェロトランセンデンス的な行動に気づいたとき、かれらはその行動をどのように解釈するだろうか。こうした問題設定から、ジェロトランセンデンスの特徴的な行動のいくつかを介護従事者に提示し、それらに対する彼らの解釈を調べた。その結果、ジェロトランセンデンス的行動についての解釈の共通点は、病理中心の理論または、活動中心の理論におけるパースペクティブで構成されていた。

病理中心の理論による解釈では、ジェロトランセンデンス的行動は、たとえば痴呆の徴候として理解されていた。また、活動中心の理論から見れば、ジェロトランセンデンス的行動は無気力がもたらす否定的な結果とみなされていた。結論としては、ジェロトランセンデンスという建設的な発達のパ

ースペクティブが失われないためには、高齢者とスタッフとの関係に関する新しい枠組みにスタッフが近づく方法を明らかにする必要があるとしている。

(3) 労働とジェロトランセンデンス

以上に見たトーンスタムのジェロトランセンデンス理論の展開は、高齢者の生活満足度とその様相の実証に限定されるのではなく、高齢者と接する役割を持つ介護者、看護の現場におけるスタッフの老年観の検証にも広げることが可能であると思われる。介護、看護の現場の「重荷」観は、えてしてその現場のスタッフの職業意識と老年観が交錯したところに起きる問題ではないだろうか。

高齢者ケアの現場は、人間の生の終わりに関与する生命にかかわる労働(「愛の労働」ともいう)(上野, 1998)の場所である。高齢者がいかに心身に障害を得ようとも、介護の現場では高齢者の人格の尊重、基本的人権の尊重が言われたきた。そして、対等な人間関係あるいは敬老精神が美德とされてきた。しかし、いままで自明のようであり、実際はそれを理念として常に謳わねばならない状況があったとすると、このジェロトランセンデンス理論は、高齢者の人格を高齢期の人間的発達に視点を移すことで、それらの美德を理論的に支持し、人間の可能性への介入という視点から介護従事者の役割を問い直すことができるのではないかという課題も包含しているといえる。

また、高齢者にとってこれまでの親しい人間関係にしか見出せない社会関係だけでなく、あたらしい人間関係が育ち、あたらしい社会関係を生み出す可能性が、高齢期においても存在するのかどうかは、ジェロトランセンデンス理論を理解したうえで、高齢者と介護従事者の意図的な関係のなかに見出せるかもしれない。日本語で言うと「縁」(人と人、または人と物事とを結び付ける、不思議な力。)の可能性といえるだろう。もしそのような太い関係が生まれるならば、高齢者の生活の安定を支えるとともに、プロフェッショナルとしての福祉従事者、介護、看護職の役割を支えるコミュニティにおける対等な人間関係の構築の過程を見出すことができるであろう。

具体的には、行事や催し物を通して得られる「思い出」の創造を幼年、青年、壮年期のように準備しようとするよりも、高齢期には日常的な「思い出」の創出の機会とその関係が、高齢者に新たな太い関係をもたらすかもしれない。また、そのささやかな日常の創造の連続がジェロトランセンデンスに進もうとする高齢者の生活にマッチするとも考えられよう。

むすび

以上、サクセスフル・エイジングのもう一つの理論としてジェロトランセンデンス理論を幾分詳細に見てきた。社会老年学における従来の諸理論あるいは素朴で通俗的な生きがい論や新しい高齢者像論に少しでも疑問を感じている者にとって、また、そうした諸理論や論議からはとらえられない高齢期の生き方や生活スタイルを説明する理論的根拠として、ジェロトランセンデンス理論の意義は大きいと考える。しかしながら、なお検討しなければならない課題も少なくない。それらについて触れることで本稿のむすびとしたい。

まず、第一に、文化を越えた普遍性を唱えるジェロトランセンデンス理論が示す3つの次元が日本人に適合するだろうかということである。これまでデンマークやスウェーデンを中心にデータがとられてきたことから、ジェロトランセンデンス理論の生成にひとつの示唆を与えた東洋やその他諸外国における実証的研究が必要である(スウェーデンに住むスーフィ族やトルコ、イランでの調査は計画されている。Tornstam, 1997b)。とくに宇宙的次元は、明確に記述されうる程度に存在するのだろうか。

第二には、ジェロトランセンデンス理論を思弁的色彩の強い、あるいは特異な学説として終わらせ

ることなく、現実を説明する科学的理論として発展させていくための課題として、ジェロトランセンデンスをどのような操作概念で経験的研究に乗せていくかということである。それによって、ジェロトランセンデンスの次元も大きく変わってくる。トーンスタムが用いたジェロトランセンデンスの評価項目 10 項目と、それら項目から抽出された「宇宙的超越」と「自我の超越」の 2 次元でジェロトランセンデンスの到達段階を判定することには、正直なところ不満が残る。

第三に、方法的な課題であるが、ジェロトランセンデンス理論の検証で行われたレクチャーを先行させた上でのインタビュー調査ではなく、主観的幸福感から溯り、自己、社会関係の次元の超越を満たす対象者に宇宙的次元の超越を確認することで、あらためてジェロトランセンデンス理論を披露し、共感の度合いを測るという方法が考えられる。その上で、ジェロトランセンデンス理論のいう宇宙的次元の存在の有無を確認することで、ジェロトランセンデンス理論のいう発達が個人の中に見出せるか否かを検証することが考えられてよいであろう。

第四に、高齢期において、継続を望む生き方、新たな活動を臨む生き方等、さまざまな生き方があるということである。そうだとすれば、高齢者にとっては、さまざまな理論で語られる幸福感が併存しうることになる。普遍性をうたうジェロトランセンデンス理論の幸福が最上の幸福なのだろうか、ということである。壮年期から前期高齢期、後期高齢期にかけての縦断的研究は、誕生して 10 数年に過ぎないジェロトランセンデンス理論の研究では発表されていないが、今後、個人の中でおこる変化は、発達なのかさまざまなパースペクティブへの移行なのかという観点からの実証が必要である。具体的には、特にターミナル・ケアの周辺において起こりうる過程と発達理論、ジェロトランセンデンス理論との近似性、あるいは相違点などの検証が人生航路の完結の探求として意義深いものとなるであろう。

最後に、既にみたように、ジェロトランセンデンス理論の展開の可能性は現場にも存在する。しかし、人間の生き方として発達の観点からみると、ミクロとマクロの双方向の関係が新しい老年観、ひいては人間観のパースペクティブをもたらすのではないだろうか。つまり、社会全体の仕組みがジェロトランセンデンス理論を組み入れて変化する可能性があるということである。そのような取り組みの小宇宙での試みが、ケア、看護、世代を扱った論文にみられる。

トーンスタムがジェロトランセンデンスにおける禁欲的主義で引用したブラウ(Blau, 1964)は次のように述べている。「個人の願望や欲求が少なければ少ないほど、それだけ他者に依存してそれを満たす必要はなくなる。…宗教的および政治的理念の推進力は、大部分が物質的願望の充足を比較的重要でないものにする価値、そして、物質的利益を供与できる人への依存を弱める価値を吹き込まれた信奉者から出てくる。物質的欲求を減少させることによって、革命的イデオロギーは独自の強さと権力への抵抗の源泉になる」。

老後問題が近代産業社会の価値の総体を問い直すことを突きつけており(上野, 1994)、それが産業社会の構造的矛盾がもたらしている人々に対するいわれのないしっぺ返しであるとするならば(小田, 1995)、ジェロトランセンデンスした生活そのものが今日およびこれからの社会に多大な影響力を及ぼす可能性も出てくるとも考えられる。ジェロトランセンデンス理論は、高齢期の個人の成熟のみにとどまらず、人類そのものの発展にあたりたいパースペクティブもたらす可能性をわれわれに提供しているのではないだろうか。

文 献

- Blau, Peter M. (1964). *Exchange and Power in Social Life*, John Wiley (間場寿一ほか訳『交換と権力』新曜社、1974年)。
Chinen, A. B. (1989). *In the Ever After: Fairy Tales and the Second Half of Life*. Wilmette, IL, Chiron Publications.
Erikson, J. M. (1997). *The Life Cycle Completed (Extended Version)*, New York: W. W. Norton & Company.
Laslett, Peter (1987). *The Emergence of the Third Age*, *Aging and Society*, No. 7.
Laslett, Peter (1996). *The Fresh Map of Life* (second edition), Macmillan Press, UK.

- 小田利勝(1991).「高齢者の適応に関する概念的考察」『徳島大学社会科学研究』第4号。
- 小田利勝(1993).「サクセスフルエイジングに関する概念的考察」『徳島大学社会科学研究』第6号。
- 小田利勝(1995).「高齢化」井上・矢島編著『生活問題の社会学』学文社。
- 小田利勝(1998).「退職に関する新たな視点とサード・エイジの生活課題」『神戸大学発達科学部研究紀要』5巻2号。
- 小田利勝(1999).「高齢期における自立生活と日常生活活動能力をめぐって」『神戸大学発達科学部研究紀要』7巻1号。
- 小田利勝(2000).「高齢者の老年規範意識の構造」『神戸大学発達科学部研究紀要』8巻1号。
- Sadler, William(2000). *The Third Age: 6 Principles of Growth and Renewal After Forty*, Perseus Books, Massachusetts, USA.
- Tornstam, L.(1989). Gero-transcendence: A Meta-theoretical Reformulation of the Disengagement Theory. *Aging : Clinical and Experimental Research* (Milano), 1(1), 55-63.
- Tornstam, L.(1994). Gerotranscendence: A Theoretical and Empirical Exploration. In L. E. Thomas & S. A. Eisenhandler (Eds.), *Aging and the Religious Dimension*. Westport, CT: Auburn.
- Tornstam, L.(1996a). Gerotranscendence: A Theory About Maturing into Old Age. *Journal of Identity*, 1, 1, 37-50.
- Tornstam, L.(1996b). Caring for the Elderly: Introducing the Theory of Gerotranscendence as a Supplementary Frame of Reference for Caring for the Elderly. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 10, 144-150.
- Tornstam, L.(1997a). Gerotranscendence: The Contemplative Dimension of Aging. *Journal of Aging Studies*, 11, 2, 143-154.
- Tornstam, L.(1997b). Gerotranscendence in a Broad Cross Sectional Perspective. *Journal of Aging and Identity*, 2, 1, 17-36.
- Tornstam, L.(1997c). Life Crisis and Gerotranscendence. *Journal of Aging and Identity*, 2, 117-131.
- Tornstam, L.(1999a). Late-Life Transcendence: A New Developmental Perspective on Aging. In L. E. Thomas and S. A. Eisenhandler (Eds.), *Religion, Belief, and Spirituality in Late Life*. New York, Springer.
- Tornstam, L.(1999b). Gerotranscendence and the Function of Reminiscence. *Journal of Aging and Identity*, 4, 155-166.
- Tornstam, L. & Tornqvist M.(2000). Nursing Staff's Interpretations of "Gerotranscendence" in the Elderly. *Journal of Aging and Identity*, 5, 1, 15-29.
- 上野千鶴子(1998).「出生率低下：誰の問題か？」『人口問題研究』54-1、41-62頁。
- 上野千鶴子(1994).「生きられた経験としての老後」『近代家族の成立と終焉』岩波書店。
- Walker, Joanna(1996). *Changing Concepts of Retirement*, Arena, UK.